

室生犀星全集

第七卷

新潮社

室生犀星全集 第七卷

昭和三十九年九月六日 印刷
昭和三十九年九月十日 發行

著 者 室 生 犀 星

發行者 佐 藤 亮 一

印刷所 二光印刷株式會社

發行所 株式會社 新 潮 社

東京都新宿區矢來町七一
電話東京〇〇一二二六(代表)
振替東京八〇八番

定價 一五〇〇圓

室生犀星全集

第七卷

題
字

編
纂

西
川
寧

奧 福 伊 窪 中 三
野 永 藤 川 野 好
健 武 信 鶴 重 達
男 彦 吉 郎 治 治

第七卷
目次

第七卷
目次

小説

巨いなる象	三
荒野の都	三
はるびんの歌	三
鼈	三
濁り江	三
すらぶの琴	三
中央大街附近	三
君子の悲しみ	三

道外	三
古き露西亞	三
ニコライエフスキー寺院	三
南京豆	三
中央大街裏	三
安東縣	三
朝鮮	三

聖處女	三
大陸の琴	三
近江子	三
波折	三

死のいざなひ	二九二
つくしこひしの歌	三二
蝶	三三
故山	三六

隨筆・評論

〈駱駝行〉

駱駝行	三九
生菜料理	三六
小説の自然描寫に就いて	四〇五
全集期の作家	四〇九
實行する文學	四二〇

小説の連作	四七
冬至梅日記	四三

へあやめ文章

三獸渡河	四三六
大陸の春	四四一
あやめ文章	四四四

へ此 君へ

早春一夜	四三八
大戦の思ひ出	四三三
講演	四三三
小説も生きもの	四三四
漂泊	四三九
文學は文學の戦場に	四三三
小説三羽鶴	四三三

自 戒	四六六
小説の奥	四六八
文章の恐怖	四六九

へ花 雲へ

文學者と郷土	四七一
交友録より	四七二
詩人系小説家	四七六
菊池賞を受く	四八一

後 記

豊熟と途上の障礙	四三五
解題・校訂	四八九
伊藤信吉	四八九
結城信一	四八九

詩

ハルビン詩集

序文並びに解説

昭和十二年四月終りに私は滿洲に旅行した。大連、奉天を経て奥地哈爾濱に入り、哈爾濱には一週間滞在した。旅行がらひな私の生涯でもつとも長期長途に渉る旅行で、歸來『大陸の琴』といふ長篇小説を書いて、はじめて見た異國の風俗光景を敘して朝日新聞に連載した。その旅行中奉天でも、大連でも、哈爾濱の街々でも、すぐ口にはる機嫌の好いうたのたぐひは、いたるところで詩のかたちをもつて、微熱のほとぼりのやうなものを私にあたへた。當時はもう若くない私は五十歳に近く、詩の微熱にをかされる筈がないのに、松花江や哈爾濱の街々を歩きながら、うきうきした眼で最後に鴨綠江の夜半の濁り波を見て歸京した。そして綴るともなく一詩巻を編んで見たのが、本『哈爾濱詩集』なのである。この旅に出向かなかつたら哈爾濱詩集の文業もなく、私は日本のほかの土を踏まずに終つたのである。

私はこの哈爾濱詩集を一冊の書物として發售したいのぞみ

を永い間持つてゐたが、今日まで二十年間その機會がなかった。書物は出したい時に出来ないが氣抜けのするものだが、私は哈爾濱詩集の原稿に折々眼をやつて、あれはまだあのままで詩集にならないかと愛惜するがごとく呟いて見て、そして少し不機嫌になり、もうどうでもよいと虚しく打つちやる氣持であつた。その打つちやる氣持はなかなか晴ればれしくなく、鬱勃は遂に今日に及んだものである。

日本放送協會から先年人が來て、詩の朗讀を録音したいといひ、いやがる私に詩の朗讀をさせた。その折、私は集中の四行詩の清朝第二代の詩をいさましく敢て朗讀した。放送局はこの録音を私の死後例のラヂオで一二分間さし入れて、これはこの不倖な詩人の生きてゐた間の聲だといふやうに、縁もない方々に紹介してお聴かせするつもりなのであらう。私もその氣で朗讀したが、それらの詩は悉く朗詠調であり好んで語韻を踏んで作成されてゐた。旅中の亢奮状態がいまだにいまじくも脈を打つてゐるのを、私は、折あらば旅行だけでは若い時に置くべきものだと思ひ願したものである。

昭和三十二年五月二十八日

黄 海

波衰しく濁り

船は黄海に入る

かかる海原はいづくまで續くらむ

海原に何のおもひのやどるらん

つばくろは航海にまつはり

去りも行かざれば

われはしばらくひとみとどめむ。

つばくろは今宵何處に、

いづくに塀^{ねぐら}あるものならん。

大^{ダルニ}連

わが船はダルニの港に着けり

我は船を下り

ダルニの街を行き

日暮れて乏しき飯^{いひ}を食べけるに

はや葱とにんにくのほひ走りて

表には支那人らの口々に呪文のごとく

あわあわと喋れり

何の意味かはえ知らず

ダルニとはかかる町にや、

もろもろの旗立てる船ならび

みな汽笛鳴らして

あさ夕となく往きかよふなり。

旅 順

旅順の道路は眩しく

日のひかりは道ばたにあふれぬ。

海は堇を溶き

帆は蕊のごとくならびたり。

此處こそは旅順なり。

われは二百三高地のうへに立ち

二百三高地のはつ夏に逢ひにけれ、
此處こそは旅順なり。

馬

馬の毛はみな刈りとられ
だんだらの波をつくり
馬の鼻はひらきて
その首はみな垂れるたり。

荒野の王宮

われは眼をみひらき
ホテルのごとき白き砲壘に
過ぎんとする風の音を聞きすましけり。

石獸

荒野なる
王宮かたぶき石獸の
吼ゆるに堪へず
人ら群れけり

荒野なる

王宮はひそとしづもりて
蔓に黄金の
苔をいただく

大荒野の

極まるところを知らざれば
王宮の階に

のほるくちなは

くちなはも

大き枯野に生きたらむ

石階^かをのほりつ

あそびほほけり

石獸ら

むらがり立ちて吼えゐたり

走獸の肌に

我は手を觸る

石獸の

叫び立つとき黄塵は

蒙古の天に

捲きもおこらむ

此處に來て

石のけものの肌にさはり

巨大なる足を

眺むる我は

石獸ら

巨いなる足ふまへけり

荒野のなかの

城の深きに

いにしへの

麒麟のまなこ怒り立ち

もろがみ立てて